江戸樂舎用

校正

菊養

上巻之本

江戸樂舎用

翁問答序

志学のともがらは四書をまなびおこなひ五経を
しらんがためなりおのれひとりの教門をもつて
しるべきものにあらず波羅波道をもつて
乃みち偏僻なるその法をもつて人倫日用を変用
するものあるゆへに儒門にはこれ四書五経の
真教をもつぱら切磨鑽研をくはへ三隅
を反せざるをもつて乃ち過なきを期しがたし
こゝをもつて小道一芸にもひとしくうら
やむべき番乃あやまりなきひとをもつて世のほまれ
ことわりとなす而て師範の人にあらざるが

江戸樂舎用

ひぬ暫くの間寵愛わすれがたきあり
天君しきりに是をとあり
のうるまもまく防ぐ○凡技をもつて海内をけ
我朋力伯樂なるべハ鉄駑れもちハ去れども威
俊ハ世者さうく人あい和厚して温逸なれ俗
儒の儀案をはぐしく是案ふらひ心なるべ
去るつくくやまれ時の日あるは○よ儒よ行ね
門下よ祈充ごく俊秀なる人あるて平日旋問論難
やしこれなるかるつて是を去るべ我
仁のとよだれ像ハ記憶ともとびるよ心の粗
毋とりあまで去りぞひく儒ぞて書つけ遺

忘りそるへれ新して世ともて去りれ拙で箇象
ものまるよなるまんよまりあよあこなよ為さ為と
とう用悟り解ろ拙よあれでりまる我ときの
愚者ハのしし第一ユ吏のさもなるさもあ
るさめうし義問答と部号して中箇にう
と紀宣ることもるしくとあるさてがるれ
君子去刪ときとしむ為さの事なる○で民
為去のうさつけるまして箱のなかるる
ごとろるんなかるべし為ふむ人あるし辞ふ
て去とそこなびハ君人の大幸なるべ為ろ

江戸樂舎用

翁問答上巻之本

○神道問答問曰人間は心ばせをあらためとゝのふるところ
その和あり きたらふ是混乱していづまよふ志
さらばいかゝをあらためば人間一生涯ゆるまの道を愛
用し業と仕るべくや
師の曰はれ人乃為れば
よ道法あり道とは天下を治乃霊寶ありこれたら
ずと用ゐる心よりおこるよ邪領とも邪道
は寶ハ上天道より授ける下界海あるさうるの地
ちるゆゑ上たるをもつて偏ゆるまり乃和
まで人偏に和睦して うゝの神明よつて
まもまし神明愛しまし天下とあさむまはて

翁問答

江戸樂舎用

ゆへなり父母死天年ならざるありてなげきわるる也
うまひよりのる時ものの法をもつて葬をなし喪に服して哀戚をはつて宗
廟祠堂をもうて鬼神を祭る諸敬をはつて合奠の事をあつまりさしもひ
とをの事と云なり重新乃ち慈愛をもつて道義
をもつてなり然る故に孫乃ち尊座乃
苦労をいとうてなり孫ひのまに育てぬると姑に
息の憂と云姑息乃ち暫と云なり
子孫をつくるなり姑の恵乃ち愛と云半の
八慈愛に似れともその子氣味なりて半もあく

ほとをもつてくりけるものふちくなりぬまを畢竟を
子孫をくうてのこさ道へひさいるにあれそのうへ
わるものあやまるものをもつてこれをもつてむやみ方なる
ものにうけるものが孫乃ち子孫乃ち孫乃ち孫乃ち
のなれをもつて孫をうんだんハあやの方なりるとひき
とそぞてのこさみらへをきつくハあやの方と慈愛
屋あるつるにもたなるばるゆへよまくとへ
さるハ大事乃第一なりて又孫乃ちもも子
孫なり敬と屋よりもも子孫ものを孫をあへ
もつてもの孫の繁昌とりもしハあつてりこ
ち孫ばかりの孫乃ち屋つさ屋くなり

江戸樂舍用

て一概(がい)にとかくのはなしとのみいひすてたまはず
此頃どもへて宿心(しゆくしん)の善悪(ぜんあく)と何やうのものあるべし
への根ざしには才藝(さいげい)人にまされたる者共無縁(むえん)にて
にんげんのかまはれありしにむかしの能じけっかん
きんの孝行(かう)のきさをのへちん鬼神(きしん)のまくこまるる
まふこころなれども一旦(たん)えいぐはにかこつにはしとなる
らば一代二代のうちに子孫繁昌(はんじやう)するものゝためし
ずらあつせざれどもあるひはなきさ人へもまく先祖(せんぞ)の
すいたいの人にまゐりて相続(さうぞく)せされても子なきにひとし
またよその人も眼前(がんぜん)一たんの富貴(ふうき)かまはれその身の上
のものなりとおもひてうらやましくおもふは法然

冥宝とぞ侍りしかしてこれまたまさの善悪の先祖
ましけるまでその外いろいろにも見ればそのものゝかはりとおもひ
前生(ぜんしやう)悪比(ひ)とならむにくるしむ身の上のたのしみとあらゆる事と
まうして無下(むげ)に議ましさそ子孫にとしゆるは幼
幼(よう)のころは胎教(たいけう)よりむかしは胎教とて胎内にありて
あひだまでも母の教化(けうけ)あるにつけては人を道理(だうり)と
らざるやうにあらそうつみにはへぞよしへの道のありと
思へり教化(けうけ)の真実(しんじつ)を考へしこまかにしてくちにくいひと
是ぬるむつりとおしへとぞしてよりおこることは也
因縁(いんねん)真実の教化(けうけ)は深(ふか)き教(けう)なりさしまくまことよへ
むかしてさきあきそみち残おこなはく人をなやむの

江戸樂舎用

と変化とて後漢書とい
ふたくさんでありて拙をうる
ゆゑ大のものをとるに
乃風気ふしちくく人間のむまれつきをてばか
りあるまといとぐも調つきよハぐまんらい京男乃
義をあらはゆへよ者ごのそ
ものをたち京まくそぐそてね
まて実乗まくまれうをものも京こぐりあり
くまんとうまくそぐくねまで京まて生れ者
りのも実乗とぐよなるまくあさなれりてこて
ろくて力ものも父母めをなをとんくてかりら
とあやりうをゆやうふしちく父母めをとの源教と
ゆ孫よとゆる根むをあゆよ乳母乃人ぐをを

えくい父母乃力をあるあ心とたくしくして金春
みちをくちふくうち力よあこなひてとくの根むを
憍慢とべしハつのつよあ芸なりぬる時ハひむれつき
利根なるものよハ書物とを海あまくまの夫
ぶをときさをてるとくをとくをの六芸の
うち急用なる芸ちくくとおくつ中海道
俊のとくへをもをとべしまれつき過ぎてさい
くく義俊乃ものなりがるきよをまの義理を
ろくをくかちうさをてくまの法のを心とうをるべ
てぬ人とあるくくへをちくくくをべし家業の時
まるとくくハ師匠とな成えぬとあくへ乃服を

江戸樂舎用

正技

舞答

下巻之末

江戸樂舎用

荀問答下卷之末

○仲元問曰狂者とは何ぞや

師乃曰狂者とは仲尼廣大高明の心を以て惜と又
もいまだ精微中庸に密に惜入せざる小なるを
見性成道の心術粗疎迂闊にして修行更相違
狂なるものなり史唐にて許由巢父牧皮曾晳子
桑戸莊子天益にて老聃孔丘陽主の類
皆人に生付たる性にて見性成
道なる故に上中下の三品あり中行者聖人の下亜
聖に史賢なりあれハ三品乃うちにて形一品上に位也
狂者中行に下者三品中の位なり者三品下に位猖

江戸樂舎用

と云序と此の冥神と吾幽と合と宮殿よ光被
しよりよ捨子ある殺よ南面の位よありて八帝堯
乃者なり北面乃位よありそ帝舜北位する処
位をゆとして下しまりて八玄聖素王北乃多り孔子
曰夫聖人之為又何加於孝乎

寛安二暦初冬

風月宗知室刊行

江戸樂舎用

新刊

算法

改正

江戸樂舎用

箱岡答下　丙戌冬

魯國ノ君莊子ヨリ問テ曰魯ニ儒者アリ
ウシテ先生ノ名ヲ聞ルコトアリ莊子曰魯ニ
小ナル儒者甚タ多シ君アヤマリテ多シトスル乃
チ魯ニ出ル日魯ニ儒ノ人ハ皆儒服ヲキテ居ル
ヲ見ルトイヘトモ莊子曰儒服ヲ儒者ノ裝束カ
ナリ仁義ヲ儒者ノ源ナリ裝束ハ誰モキルヘケレ
儒服ヲキルヲ人ハマコトニ仁義ノ心アルヲ儒者ヨリ
モ儒服ヲキル人ハ凡ソ多クハ仁義ヲ君子ヲ
里乃受用ヲ源トスレ夷國ノ裝束ヲ
キテ人ハマコトニ仁義乃心アルハ凡ソ多クハ夷

江戸樂舎用

潮田春を我藤樹先生乃撰ぶ処なる先師
の業て仕を豫州より勤して江陽より豫州乃
同志先覚より離て刑儀とうしなひ又学ふ
ほうかれハ獨書の獨発とも得角ふと
あけて惑を弁へ深く入ることを能彼名を
みて多興へ事を希ね師先より授て洛に
出春上下と著しる時より寛永十八年
春巳乃業雖師の学愈新なるよりて

江戸樂舎用

此問答愈を心より深くし改めの志ありまたれば
廣く門人まぐに授けられる事と爰に癸未の年
樟人の弟子より洗心樟ふるとどめしを
幸ひ早く知て見るべなりね
或人曰菊問答其文正明にして痛快遁要
人の愚あるがごとく見えて擴て益をうること多
かるべし何ゆえかくは秘して授けず
幸ひ師の曰答は問答を出せ時今ま
だ学ばざる且聖道の行れ
ざる様うまひ未学の輩を教へ心ある者を教へ
其後緣抑揚甚しく過て主角の累をまね
れ況擴人吾本意をさとらずして或は
勝心を助ん恐る世ふ益なくして損あん
吾これ残改めんし欲と放り今ひ弱く傳
ん事を欲せと
丙戌の年下巻一篇を正しまつり丁亥の

江戸樂舎用

年又これを改めんとて病をもつくの故にやむ
事多く終に未完に年上巻を改め書せんと
欲をもづる事多く果さず
先師常日同巻の中僧佛を論ずる処乃ごとき今
これを讀ふに理精密なるの事を覺ふ
又曰同巻上巻吾孝經に觸発して筆を下す故
に頗孝字を播毒を孝經乃肯不おのそい殺多ふ
事のごとくなれども今これを撰ぶ去るべし

又曰此書志事ありて世を憤り難を憂ふ的乃
人讀ん或ハ觸発興起ほんの心術の精微用功下
手乃実地乃ごとき記さいまふ新く論じ及ぶと
先師の意かくのごとき是をもつて同巻を
おしるべし肯ふあるべ故に卒して感念
これを義を述ふ多今年春又梓に誤れて
に板乃を驚れて讀に乃草稿乃如みして
旧本乃清書にぶるとも何のごとき隠うせると

江戸樂舎用

もとよりや誤字脱簡亦間多し故に今や
ひとたびもてこれを考訂し且前後改正
乃篇を編入し并に其事を叙して卿法師
の志を伺ふ事てこれを梓に刻し嬉者
これをもつて学乃用に資する事を考
へ法に同者をもつて多くもて稽徴
中庸と希ひ奈し書乃入法乃階級とも
まねぶ事なをざりなるを小憤きて滴血乃実
を致知乃功をもつなるは都て先師乃あて
れ弊に陶んで吾黨欽哉

嘉安三年庚寅夏六月既望門人識

江戸樂舎用

菊岡考

一

江戸樂舎用

翁問答序

志州高藤波切

志学より年より心よりまもる。身を行ひ道理を。もとめ得まくおもひ立て。禅門教門も。釈教も。年ゝ学とゝ。其言。設道よりて。其道偏僻なりその法まゝ。人倫日用より。受用よりたるもつぶるゝなり。儒門より入て。四書五経の真教をうけて。切磋琢磨をこゝ。せども。三隅を反せざる。愚なるは。解悟より自得。をようひゝ。すでに。道より立ゐ。年をも。忘れ。時を。所を。耶。其人はあゝぶるとゝ。ひ。哲の

北方文庫藏書

江戸樂舎用

翁問答巻之一

一 体元問曰。人身心ぶそぶ。行和そ其和ゑ。そそうちに。毫髮混沌ていづまよまぐゑ。おぼゑそ人間一生涯のうちいづまそ道をう。受用そ。ざとぶ。ぶくゐや

一 師翁曰。人の身そうちに。至德要道とゑ。天下治ゑの。実實ありぶたうを。ぶくぶ心よまもゑ。身よ行ゑめとまるなゑぶ。實をもて。五倫の道を行へば。倫そ。皆和睦して。うゑ。ぶ實をぶく神明ゑり。ぶうゑまそ。神明納受ーたまふぶたうをもて。

江戸樂舎用

鵬の大鵬をまうけ給ふにことわり給ふ孫に養はせ給ふ。幼
かの時を根本とし給ふ。胎養とて胎内にあり
うちにも母胎の養化あり。今時の人は道理をもつ
ぎらぬよ。おさなきうちには養はなきものなりと
おもへり。養化の真実をもつぎて只はぐくみ
と人のうるおうをもつて養とおもふ。おこりうる道ひ
かり根本真実の養化は。胎教なり。はぐくみとへ
ずして。己身をもてあそぶを行ひて人のとのづから変
化するを。胎教と云だと人びとの物をうばとり失
の物をかりたがごとし。母の方角水の気ふ

よりもろくべうの気質をこづくりかりとゝ以と
を得つきまは。えを来京田舎の光別なさなり。赤
子の時ゝ京みゝくゝぶそなまは。南東みてまゝ
ゝのも京云楽になるものなり。南東みゝくゝぶ
てなまは京みゝくまもの。南東云楽ゝ
なゝのゝ。おさなき者の心ぶて身
をもちし父母めのとなどの心ぶて身をもちを人あや
うきゆゑあやうにゝて父母めのとの胎養を
孫よをゆゝ根本とゝもゝ友よめゝとの人ゝを
ゝゝび父母の方をおさ免心可くして全者のゝ

江戸樂舎用

ゆゑ。ぞ吉凶禍福あり。世教よ光彼し。上下格つ。志
ゆゑよ。南面の位よりてハ。帝堯君ゝるや。北
面の位よりてハ。帝桀君ゝるや。位を以ず
てゆゑにありてハ。玄聖素王の位なり。孔子曰。文聖
人之德。又何以加於孝乎

五條醍醐町

慶安二己丑年初冬上旬　勘右衛門開板

北京大学藏書

江戸樂舎用

詩云緡蠻黃鳥止于丘隅

中江藤樹肖像

江戸樂舎用

江戸藩舎用

江戸樂舎用

薩摩書院
分部昌命謹書
漢本堂

江戸樂舎用

江戸樂合用

顯考季重府君神主
孝子藤邨奉祀
藤樹先生神主
顯考惟命府君神主
藤樹先生夫人神主
顯妣惟命公夫人高橋氏神主
藤樹先生三男神主
常省先生神主

江戸樂舎用